

令和6年度全国中学生・高校生防災会議

「全国防災ジュニアリーダー育成合宿」 報告書



National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

事業目的

地震や火山噴火、水害等様々な災害が頻発している日本において、これからの防災や減災の社会の担い手である全国各地の中学生・高校生を対象に、今後の防災や減災について考える機会を設け、人材の育成、防災意識と社会参画意識のさらなる向上を目指して開催しました。

事業概要

主 催：独立行政法人国立青少年教育振興機構

主 管：国立諫早青少年自然の家

特別協力：公益財団法人上廣倫理財団

後 援：文部科学省、長崎県、長崎県教育委員会、諫早市教育委員会、島原市教育委員会

日 程：事前オンラインプログラム：令和6年12月7日(土)

メインプログラム：令和6年12月20日(金)～22日(日) [2泊3日]

事後オンラインミーティング：令和7年2月26日(水)

会 場：国立諫早青少年自然の家、雲仙岳災害記念館及び普賢岳周辺、島原市文化会館

参加人数：参加者98名(生徒57名・教員27名・視察者等14名)、参加校23校

講 師：雲仙岳災害記念館館長 杉本伸一 氏

防災教育学会会長/兵庫県立大学客員教授 諏訪清二 氏

長崎大学病院災害医療支援室室長(准教授)/長崎大学病院高度救命救急センター副センター長 山下和範 氏

参加校

北海道

北海道岩見沢市立緑中学校
北海道静内高等学校

九州

北九州市立石峯中学校
大分県立佐伯鶴城高等学校
長崎県立諫早高等学校
長崎県立諫早東高等学校
長崎県立佐世保南高等学校
長崎県立松浦高等学校

近畿

京都府立東稜高等学校
滝川中学校・高等学校
兵庫県立舞子高等学校
和歌山県立向陽高等学校
和歌山県立那賀高等学校

東北

岩手県立大槌高等学校
岩手県立釜石高等学校
山形県立遊佐高等学校

関東

千葉県立館山総合高等学校

四国

高知県立高知東工業高等学校
高知県立高知北高等学校定時制昼間部
高知県立大方高等学校

中部

新潟県立糸魚川白嶺高等学校
静岡県立富岳館高等学校
暁中学校・高等学校

プログラム概要



12月7日(土) 事前オンラインプログラム

事業当日までの不安を解消し、スムーズに交流が開始できるよう、事前のオンラインプログラムを実施しました。

各校の活動紹介

ZOOMのブレイクアウトルームに分かれ、事前にまとめた各学校の取組を他の参加者へ説明しました。

他の参加者からの質疑にも答え、各校の学校紹介や活動紹介を行いました。

目標設定

ブレイクアウトルームに分かれた班別で、当事業へ参加する目標を設定しました。この各校の目標意識を共有する活動を通じて、事業当日への意識醸成が図られました。



12月20日(金) 国立諫早青少年自然の家



ウェルカムパーティー

夕食をパーティー形式で行うことで、出会ったばかりの参加者同士の交流を促進するとともに、楽しく学ぶ雰囲気づくりに努めました。

レストランの食事、地元の郷土料理が並び、長崎の高校生による長崎県クイズなども開催され、九州・長崎を知ってもらう工夫がなされていました。

1人1人が名刺交換を行いながらファーストコンタクトを行ったことで、緊張気味な生徒も、名刺というツールを活用し、交流の第一歩に挑戦しました。



アイスブレイク

参加者の交流を目的に、身体を動かして楽しむレクリエーションを実施しました。会って間もない参加者同士でしたが、たくさんの笑顔が見られ、この後のプログラムで積極的に意見交換できる関係を築くことができました。



講義 (講師：山下和範氏/長崎大学病院災害医療支援室室長)

講師から、DMAT(災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム)の活動の様子や活動に伴う被災地域の状況等について講義をいただきました。

災害時の様々な支援の動きの中で、中高生としてできることは何か考えるきっかけとなりました。



12月21日(土) 雲仙岳災害記念館及び雲仙岳周辺

④ 9:00 フィールドワーク (講師:杉本伸一氏/雲仙岳災害記念館館長)

島原市へ移動し、大量の土石流によって家屋の1階が埋まってしまった遺構跡、火砕流で多くの方が亡くなられた「定点」、今後の噴火や土石流に備えて建設している砂防ダムなどを見学しました。

雲仙岳災害記念館で記録映像や資料を見学し、雲仙・普賢岳噴火活動による火砕流の速さや被害について、理解を深めました。



⑤ 13:30 パネルディスカッション (ファシリテーター:諏訪清二氏/防災教育学会会長)

4名の代表生徒とファシリテーターのほか、古賀文朗氏(諫早市自治会連合会会長)、杉本伸一氏(雲仙岳災害記念館館長)にも登壇いただき、生徒の防災への取組などに関しての意見を交換しました。

古賀氏からは、昭和32年に発生した「諫早大水害」の話もされ、人間が自然の脅威と共存してきた歴史、地名を周囲の社などを調べると過去の災害に関する情報や教訓が残されている話があり、ファシリテーターからも、個人レベルでできる事は何かという問いかけがなされていました。



☉ 15:15 ワークショップ

A4用紙を使い、印象に残っているプログラムとその理由、今までの自分の取組（関わり方）、なぜ防災に取り組んで（学ぼうとして）いるのかを個人で書き出した後、グループに分かれて発表しました。

個人の深い動機まで掘り下げることで、次の活動に向けて初心を確かめる活動になりました。



国立諫早青少年自然の家

☉ 19:30 アクションプラン作成

自分たちがこれからどのような活動に取り組むのか、グループ別にアクションプランを作成しました。



12月22日(日) 国立諫早青少年自然の家



④ 8:30 アクションプラン発表 (講師: 諏訪清二氏/防災教育学会会長)

4つの大きなグループに分かれ、グループで作成したアクションプランを順番に発表し、グループ内の参加者から質問や付箋でのフィードバックをもらいました。

講師から、この事業は参加して学んで終わりではなく、参加者にとってのスタートラインであり、各地域に戻って活動してこそ意味があること、当事者意識の醸成を考える時には、「Why? = どうして?」という問いを繰り返して問題を掘り下げることが大事であること、教員の参加者には、是非、生徒の「やりたい」という気持ちを応援して支えてほしいこと、など、事業のまとめと参加者へのエールをいただきました。

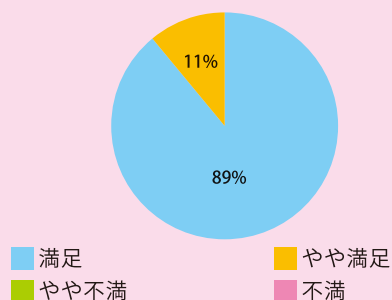


事業企画・運営のポイント

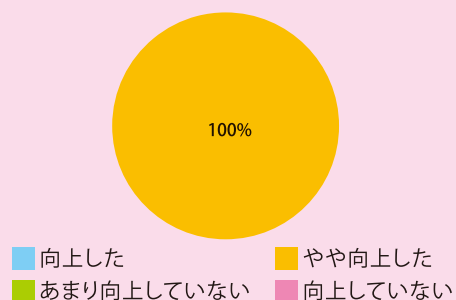
- 事業2週間前にオンラインによる事前プログラムを実施し、各校の活動紹介や当事業に参加する目標をグループで定める活動を通して、参加意識を高めるよう工夫しました。
- 初日にしっかりと交流の場を設けることで、参加者が交流しやすい雰囲気を作り出し、活動時間外にも、積極的に話を行う様子が見られました。
- 実際の被災地を回り、災害が与える影響を自身の目で見る機会を設け、災害が“自分事”として認識できるきっかけを作りました。
- 引率教員へも、生徒のサポーター・学校担当として今後のアクションを考えてもらいました。
- この会議(事業)はスタートであるというメッセージをくり返し発信することで、事業後にアクションを行う必要があることを訴え続けました。
- 事業後、事後オンラインミーティングを実施し、各校の事業後に取り組んだアクションの共有や、アクションに取り組もうとする生徒へのフォローアップを行い、活動の継続性を後押ししました。

事後アンケート 生徒 (回答数27)

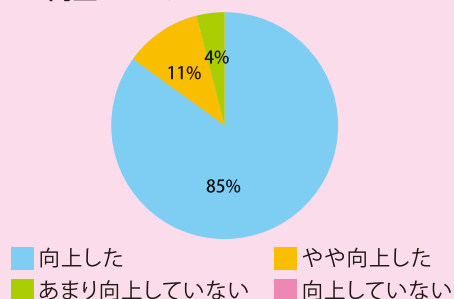
Q1.本事業の満足度を教えてください



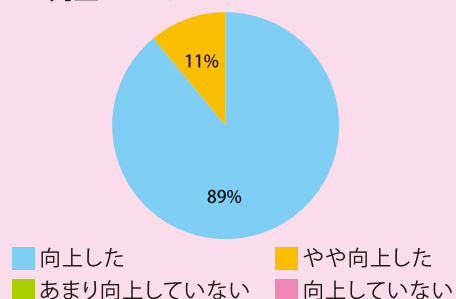
Q2.防災意識は向上したと思いますか



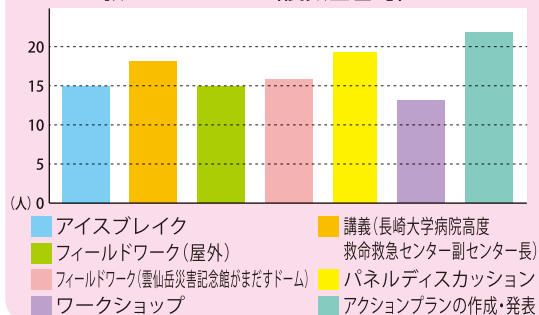
Q3.誰かと協働して課題を解決する力は向上しましたか



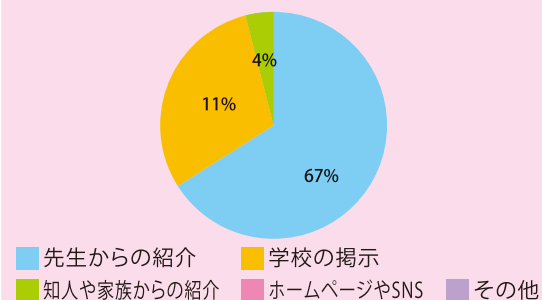
Q4.自分から行動しようとする力は向上しましたか



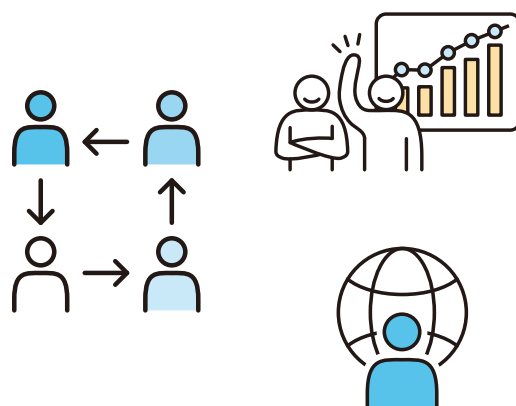
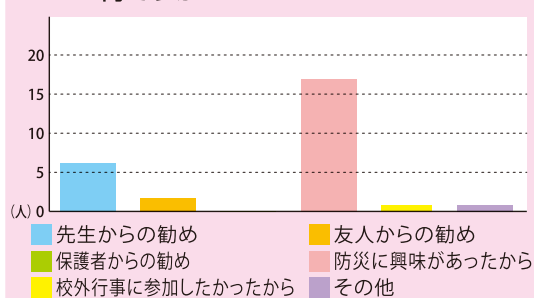
Q5.本事業の活動で最も良かったと思うものを教えてください。(複数回答可)



Q6.本事業をどのようにして知りましたか

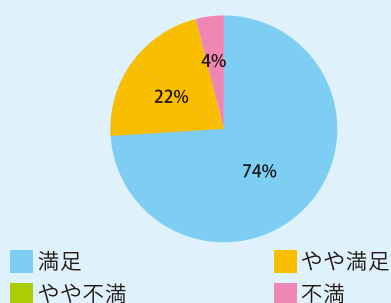


Q7.本事業に参加しようと思ったきっかけは何ですか

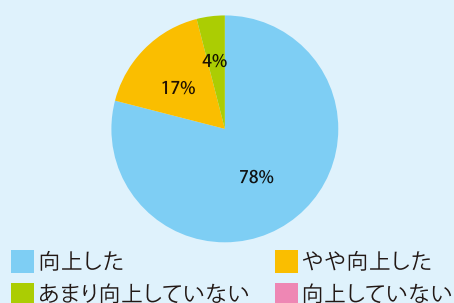


事後アンケート 教員 (回答数23)

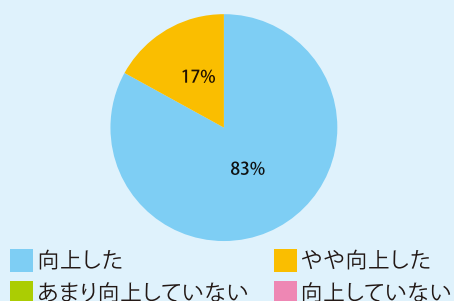
Q1.本事業の満足度を教えてください



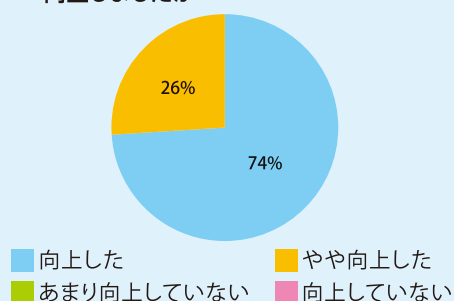
Q2.あなたの防災意識は向上したと思いますか



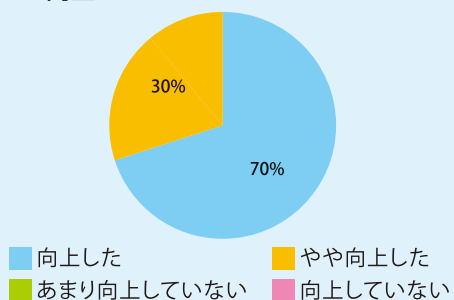
Q3.生徒の防災意識は向上したと思いますか



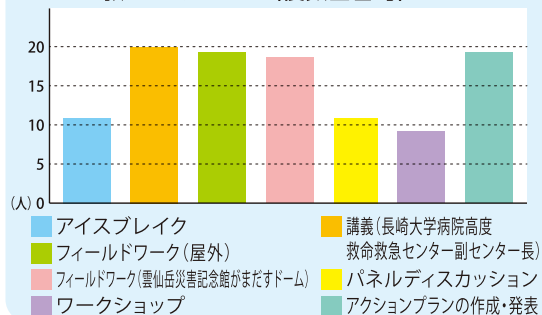
Q4.生徒の誰かと協働して課題を解決する力は向上しましたか



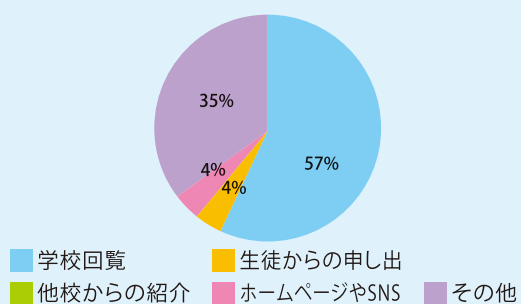
Q5.生徒の自分から行動しようとする力は向上しましたか



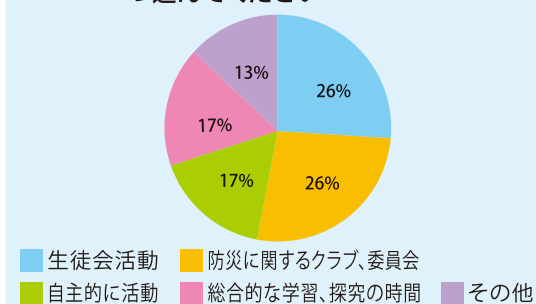
Q6.本事業の活動で最も良かったと思うものを教えてください。(複数回答可)



Q7.本事業をどのようにして知りましたか

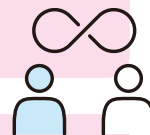


Q8.参加した生徒に最も当てはまるものを一つ選んでください



参加者の声 生徒

他県の防災活動への取り組みを知り、行動に移すことはすごく大切なことだと改めて感じました。私の学校は防災活動に取り組む人があまりおらず、学校としてもあまり防災教育に力を入れていません。今まで防災について語り合うことが無かったので、たくさんの方々と防災について熱く語り合うことができ、すごく楽しかったです。



以前の私は、行動起こす、学校巻き込む、地域巻き込むとか無理だろうと思っていました。しかし、今回の合宿を通して、学校を巻き込みたい! 地域を巻き込みたい! 広島、長崎の平和学習と同じくらい、もっと防災学習に熱心に取り組んで欲しい!と思うようになりました。



防災の知識の向上はもちろん、他者と関わるからこそが、学びの源なのだと感じました。私はこう考えるけどあなたは思う?と問うと、私の中では考えられていなかった違う視点や、知らなかった新たな知識がたくさんの場所から飛んできました。それが対話するってことなのだと改めて感じました。

参加者の声 引率者

とても刺激的な3日間でした。次の日が楽しみで、寝る時間なのに眠れない…となったのは、小学生の時以来でした。先生方、生徒たちと話すことで、各校の課題や先生の思い、生徒の思いなど、沢山共有でき、大きな刺激を貰いました。明日から防災について頑張ろうと考える事ができる良い合宿だったと感じています。



先生同士で全国の様々な取り組みを共有し、良いアイデアを取り入れるための機会となりました。防災減災に取り組んでいる学校が少ない当地の学校にとって、貴重な場でした。やってみよう、という実践も沢山知ることができたため、来年度以降の計画に取り入れていこうと思います。

丁寧に計画された事業で、すべての取り組みが何かしらの目的をもって作られており、すべての取り組みに学びがありました。意識の高い生徒の皆さんと活動できて、本校生徒も成長できました。

事業の成果と課題



【成果】

- 文部科学省安全教育推進室や「世界津波の日」高校生サミット2024事務局の熊本県危機管理防災課にご協力をいただくことで広く広報することができ、新規参加校が増加しました。
- 事前のオンラインプログラムを実施することにより、早い段階で参加者が学び合える関係を築ことができ、事後のオンラインミーティングを実施することにより、事業後の実践意欲の継続性の維持につなげることができました。

【課題】

- 本年度は12月の開催となったため、年度内にアクションプランを実行できる時間的な余裕が学校にないことが懸念されます。
- 3名以上の生徒が参加を希望した学校がいくつかありましたが、予算の関係上、県外校は1校につき2名までと制限しました。意欲ある生徒が、より多く参加できる運営体制を整える必要があります。

World Bosai Forum2025への参加

令和7年3月7日(金)～9日(日) ポスターセッションは7・8日に実施

会場：仙台国際センター

参加人数：参加者7名、参加校4校(北海道、岩手県、兵庫県、長崎県)

ねらい：機構がこれまで行ってきた地域を担う防災ジュニアリーダーの育成の取組、そして、参加高校生が事業で得た学び、事業後の取組等を広く発信するために、「世界防災フォーラム2025」でポスターセッション発表を行いました。

成果：これまでの取組や高校生の取り組みを発表した結果、POSTER AWARDを受賞しました。

ポスターセッション導入

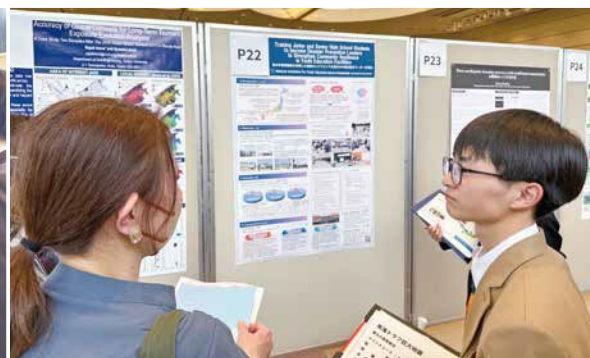
会場の雰囲気慣れ、どのような質疑応答を行えばいいのかを体験から学ぶため、他のブースを回りながら自分が質問する側としてセッションに参加しました。

大学生や大人からの回答を通じて自ブースにおける説明のヒントを掴もうと、興味を引いたブースに対して質問することに挑戦していました。



ポスターセッション発表

1、2日目のライチタイムがポスターセッションのコアタイムに設定されており、ポスターを見て回っている参加者に対して、ポスターや自分たちの取組の説明するとともに、質問に答え、感想や意見に耳を傾けました。準備してきた英語のスピーチや持参したフリップを活用することで、国内外からの参加者が理解できるように説明を工夫しました。



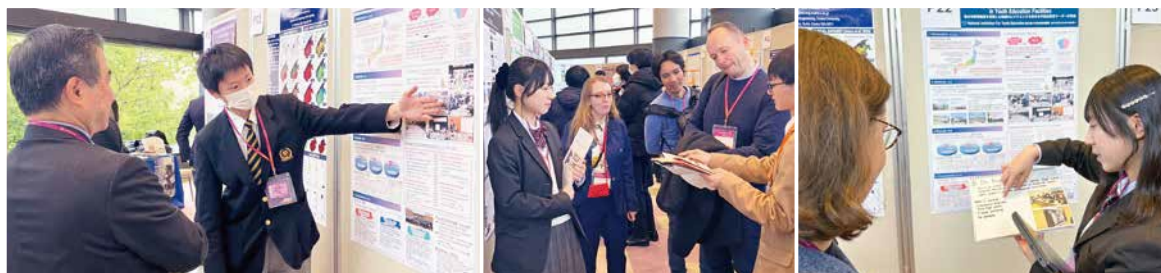
全体共有・前後半担当の引き継ぎ



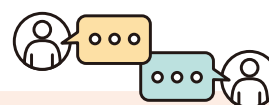
2日間の発表日程では、前後半に分かれて説明しました。

後半の説明者と交代する際は、説明の仕方やポイントについて情報共有を行いました。

これまで説明していた高校生が実際に来場者に対して説明・質疑に答える姿を見せることで、これから説明を行う高校生が説明の仕方を理解できるようにしました。



参加者の感想



防災や減災についてだけでなく、英語も学ぶことができた。

最初は緊張していたけれど、緊張が解けてからは自分から進んで話せるようになった。

企業などの様々な取組を見聞することができて、すごく貴重な経験になった。

英語で説明することは難しく、英語の必要性を事前準備の大切さとともに学んだ。

積極的に話を聞きに来てくれ、防災をテーマに対話できたことがうれしかった。

大人の視点の防災意識や専門知識に触れ、詳しいアドバイスがもらえて学ぶことが多かった。

日本語の使い方や対応能力など、来場者への説明を通じて自分の語彙力が高まった。

自分たちの考えや取組に対して改善点の意見をもらえた。持ち帰って改善したい。

地元の高校に、今回いただいた意見や学んだことを広めたい。



事後オンラインミーティング

令和7年2月26日(水) 事後オンライン開催



ねらい

防災会議後の取組の情報提供や、各学校・地域での防災減災への取組をさらに進めていくための情報交換を行い、今後の活動(アクション)へのヒントを得る。

参加校の取組紹介

12月の防災会議後の取組として、高知県立大方高等学校による取組が発表されました。

「冬場の夜間避難所体験」として、夜間の被災体験を想定し、仮設トイレの設置や高齢者体験、学校での就寝、朝食作りなど、実施した生徒の感想や見えてきた課題などについて発表されました。

意見交換

ブレイクアウトルームに分かれた班別で、事業後の取組について発表しあいました。

自校生徒へ向けた啓発資料の作成や地域における防災会議での発表など、取組を発表しあうとともに、どのようにしたら他の生徒に興味を持ってもらえるか、などについて意見交換を行いました。

講師への全体質問等

講師に対して、自分たちの取組を評価する際、意識の変容をどのように評価すればいいのか、などの全体質問が行われました。

講師からは、実践の前後で行動の変容を確認すること、他の人を巻き込む方法として「自分の好きなものや楽しいのものと防災をかけあわせて」考えてみる、などのアドバイスがありました。

最後に、自分にしかできない防災を考えて発信してほしいこと、地域は中学生・高校生の声に耳を傾けてくれるはずなので是非声をあげてほしい、との激励の言葉をいただきました。



これまでの「全国中学生・高校生防災会議」



令和2年度 全国中学生・高校生防災会議 ～全国防災ジュニアリーダー育成合宿～

日時 令和2年12月26日(土)
主管 国立青少年教育振興機構
参加校 31校
参加者 166名(中学生33名/高校生80名/教員53名)



令和3年度 全国中学生・高校生防災会議 ～全国防災ジュニアリーダー育成合宿～

日時 令和3年12月18日(土)・12月27日(土)
主管 国立青少年教育振興機構
参加校 20校
参加者 102名(中学生6名/高校生75名/教員21名)



令和4年度 全国中学生・高校生防災会議 ～全国防災ジュニアリーダー育成合宿～

日時 令和5年1月13日(金)～1月15日(日)
主管 兵庫県立舞子高等学校
国立淡路青少年交流の家
参加校 23校
参加者 77名(中学生9名/高校生49名/教員23名)



令和5年度 全国中学生・高校生防災会議 ～全国防災ジュニアリーダー育成合宿～

日時 令和5年11月17日(金)～11月19日(日)
主管 岩手県立大槌高等学校
国立岩手山青少年交流の家
参加校 13校
参加者 66名(中学生6名/高校生29名/教員14名)



記録集ダウンロードURL

国立青少年教育振興機構ホームページ

<https://www.niye.go.jp/services/bousai.html>

〈発行〉 国立青少年教育振興機構 教育事業部 事業企画課 事業係
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 電話番号 03-6407-7201(代表)

令和7年3月発行